

# 「落ち葉堆肥」農法による八王子の農家と地域の活性化 ～落ち葉で農家と地域を繋ぐ～

## A Plan for Both Agricultural and Regional Development in Hachioji through “Fallen Leaves Manure” -Bridging the Divide between Farmers and Neighboring Community-

寺川ゼミ ドアスイング  
酒井 望観, 小幡 直輝, 田中 雄也, 千葉 晴彦  
指導教員 寺川 隆一郎

帝京大学 経済学部 寺川ゼミ

八王子市の農業は現在縮小傾向にある。この傾向を食い止めるには、近隣農業県との差別化と、輸入肥料依存からの脱却が必要である。そこで、本報告は世界農業遺産に認定された「落ち葉堆肥」農法という日本在来の自然農法を、近隣地域住民を巻き込みながら八王子で推進することを提案する。

キーワード：落ち葉堆肥, 耕作放棄地の活用, 持続可能性, 地産地消, 付加価値

### 1. 緒言

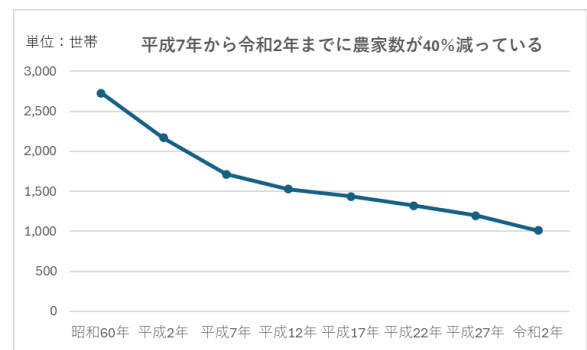
八王子市の農業は、現在縮小傾向にある。農産物産物の産出額は、2012年には26億円であったが、2022年までに約1億円減少している。農業世帯数は、1995年には1715世帯あったが、2020年までに703世帯減少し、耕地面積も1050haから約321ha減少している。このままでは地域で取れた農林水産物を、その地域で消費する地産地消が成り立たなくなり、農業体験によって食物の大切さを学び、自然を慈しむ心を養う情操教育の機会も失われてしまう。

農業活性化のために八王子市は、農地を求めている人々に情報を提供し、貸借を促進する「農地バンク制度」などの活動に取り組んでいるが、農地や農業従事者の減少を打開するには至っていない。その原因として、茨城・埼玉・群馬といった近隣の農業県と比較して、平均耕地面積がおよそ半分から1/3であり、そのため規模の経済が働きにくく、結果的に競争劣位にあることが挙げられる。また、近年の輸入化学肥料価格の高騰も、八王子での慣行農法の継続を難しくしている。近隣農業県との差別化と、輸入肥料依存からの脱却が課題である。

そこで、本報告では、「落ち葉堆肥」農法という世界農業遺産にも認定されている自然農法の導入

を提案する。堆肥の生産方法が労働集約的なのを逆にとり、学生をはじめ、近隣の非農家が堆肥生産に参加できるイベントを企画し、農業生産者と地域コミュニティの断絶を架橋できることを示す。

図1 八王子市の農家世帯数の推移



出所：農業センサス 2022

### 2. 目的

「落ち葉堆肥」農法を導入することで、自然農法と世界農業遺産という付加価値による差別化と同時に、肥料を自給することで、国際情勢や金融政策の変化による為替リスクを遮断することを目指す。

また、第一次産業の縮小により、農業生産が住民にとって身近なものでなくなっている状況を改善する手軽な農業体験の機会を作り出し、八王子の

住民が自分たちで八王子固有の農業を支援するという地域支援型農業（CSA）の理念の実現を目指す。

### 3. 方法

八王子市の農業の現状や「落ち葉堆肥」農法、CSA についての文献・資料調査を踏まえて、現地調査を行う。現地調査では、最初に、埼玉県の所沢市で「落ち葉堆肥」農法を事業化できるかどうかを確認する。次に、八王子市で既に行われている「落ち葉堆肥」農法と、武蔵野地域で行われているものとの違いを調査する。

### 4. 結果

「落ち葉堆肥」農法は、江戸時代前期に江戸の急速な人口増加による食糧不足を補うべく、農地に向いていない武蔵野地域に木々を植え、平地林を作り、落ち葉の活用により始まったことが文献調査で明らかになった。

現地調査した陽子ファームでは、1982 年頃は、近隣住民が落ち葉集めなどの取り組みに参加していたところ、所沢市や大学関係者による周知により認知度が上がり、この落ち葉集めには現在では1日最高 120 人の参加が見られるようになっていく。これが、「落ち葉はき」というイベントである。また、陽子ファームでは、情操教育を促すために学生の職業体験を受け入れ、また、小学生にチラシを配り、親子での参加を呼び掛けている。

要旨提出段階では未実施だが、八王子市で「落ち葉堆肥」農法を行っているもぐもぐファームでも今後現地調査を行う予定である。

### 5. 考察

「落ち葉堆肥」は、堆肥化に時間がかかり、現代の大量生産や低価格競争には向いていない。しかし、自給できるため世界情勢に左右されずに肥料の安定供給をすることができる。また、化学肥料を畑に撒いた場合、半分は気化して亜酸化窒素になり大気中に拡散する。農林水産省による 2022 年のデータでは、農用地の土壌からの亜酸化窒素は約 520 万トン排出されている。「落ち葉堆肥」農法は

化学肥料を使わないため、環境に負荷をかけない。

また、陽子ファームでは、オンライン販売にてスーパーなどでの価格の倍近くの値段で販売しているが、慣行農法の作物にはない甘みや安全性などが評価され、事業として成立している。さらに、陽子ファームで「落ち葉堆肥」作りを体験した人たちは、就農せずとも、陽子ファームのファンとして、ファームが価格設定した農産物を定期購入し、固定客として、農業事業の継続を支援する傾向がある。これは CSA の基盤となり得る。

### 6. 提案

八王子市の北部地区や西部地区、西南部地区には森林が多く、落ち葉集めの環境に適している。よって、これらの地域での「落ち葉堆肥」農法の導入を提案する。畑の肥料を「落ち葉堆肥」だけで賄うと、畑と同じだけの広さで広葉樹の葉を落とす木がある環境が必要であり、広葉樹が広く分布している八王子市と親和性がある。そして、付加価値によって、関東圏の農業県との作物の差別化することができる。また、「落ち葉はき」といった学生や非農家を巻き込むイベントを企画し、参加をしてもらうことで八王子での CSA の推進を見込めるだろう。

### 7. 結論

八王子農業が縮小している今、付加価値による差別化と非農家の人が農業に関われる環境が必要である。そこで、「落ち葉堆肥」農法の導入を提案する。高付加価値と持続可能性、地域と農家の懸け橋を実現するこの農法は、これからの八王子農業を活性化するだけでなく、農業を中心とした地域活性化につながる事が期待できる。